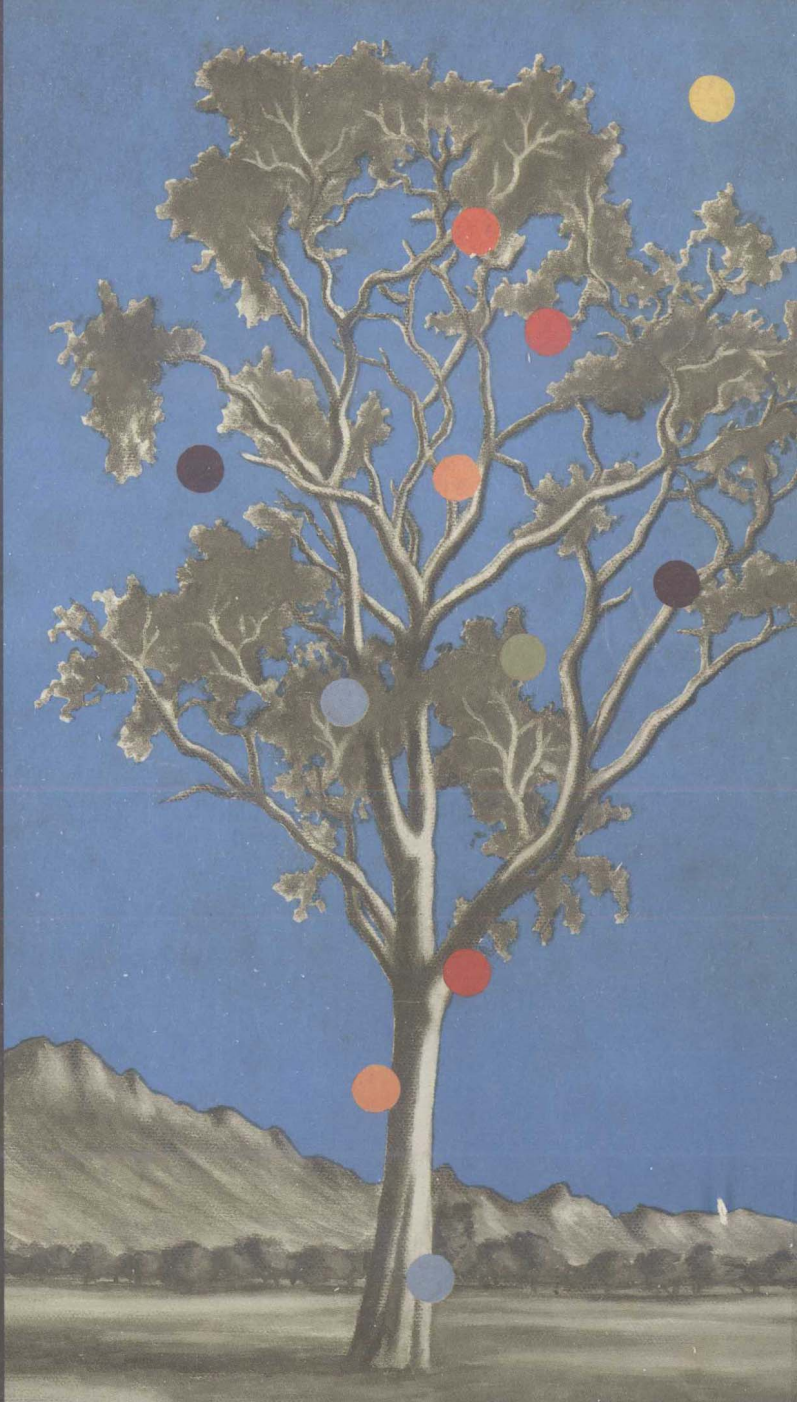
モンキー岬　景山民夫

Monkey Point Tamio Kageyama



Monkey Point

Tamio Kageyama

モンキー岬

一九九一年十一月三十日　初版発行

著　者――景山民夫
発行者――角川春樹
発行所――株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二―一三―三
〒102　振替東京三―一九五二〇八
電話／営業部〇三―三八一七―八五二一
編集部〇三―三八一七―八四五一
印刷所――大日本印刷株式会社
製本所――株式会社宮田製本所

定価はカバーに明記してあります。
落丁・乱丁本はご面倒でも小社通信販売課宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。
©Printed in Japan
ISBN4―04―872666―8　C0093

モンキー岬　目次

プロローグ・六本木 7
赤道を越えて 24
パース 39
マッキンタイア・ファーム 71
モンキー岬 117
ファーム・ワーク 135

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ジュゴンの海 164
パラダイス・ベイ 193
ニンガルー・ストア 223
戦い 253
エピローグ 284

装画　伊藤桂司
装丁　ロプロプデザイン

モンキー岬

1　〈プロローグ・六本木〉

雪が降り始めた。

六本木の街の、ビルとビルの狭間で鋭角に切り取られたような角ばった狭い空から、この街の雰囲気に似合いの、ぼってりとしたぼたん雪が舞い降りてきだしたのは、時刻が午後五時をまわって、ディスコや雑居ビルのネオンに自動的に明かりが灯りはじめた頃だった。

ＢＭＷ３２５ｉのフロントグラスに当たっては瞬時に溶けていく、そのおおぶりな雪片を目にしながら、小原陽は舌打ちをしてワイパーのスイッチを入れた。

朝から、空を鉛色の重たげな雲が覆い、肌がチリチリするような寒気と、空気中に漂う水分の重さを感じとってはいたのだけれど、まさか本当に雪になるとは思っていなかった。タイヤチェーンも持って出てはいない。

「まったくもう、ツイてねえ時は何からなにまでだな」

そう呟いて、小原はエンポリオ・アルマーニのツイードジャケットの胸ポケットから取り出

したマイルドセブンFKに、車のシガーライターで火をつけた。
ロアビルを右に見て、次の角を左折する。曲がり角の手前に黒い猫のマークを車体に書き込んだ宅配便のトラックが二重駐車していて、仕方なく右に大きくふくらんだら、背後のヤーさんのものらしき黒塗りのロールスロイスにクラクションを連打された。それでまた、不快感がつのった。
「冗談じゃねえよ、来るなよついて！」
そう心で念じてステアリングを左に切る。幸い、ヤーさんは因縁をつけるつもりも時間の余裕も無かったとみえて、飯倉片町（いいくらかたまち）の交差点方向に直進して行った。小原は心の中で、そのロールスが交差点に常駐しているソ連大使館警備の機動隊に停車でも命じられるといいと思った。
「ンとにもう、関西ヤクザがこう増えちゃ六本木もおしまいだぜ」
角から一〇〇メートルほどの距離の右手にある有料駐車場に車を滑り込ませる。砂利敷きの駐車場の一番奥の方に、ようやくスペースを見つけた。入り口近くには〝なにわ〟だの〝滋賀〟だのといった、これも関西系のナンバーの車が目立つ。大学受験のシーズンだけれど、最近の受験生がまさか車を運転して上京するわけでもあるまい。受験休みを利用して東京に遊びに来る大学生が多いということなのだろう。
「東京の街をすっかり観光地だと思い込んでやがる」
東京生まれ、とはいっても、生家は練馬（ねりま）区の大泉（おおいずみ）だから、あまり胸を張って江戸っ子だと気張ることは出来ないのかもしれないが、それでも最近の東京にあふれかえっている他府県ナン

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

バーの車の多さに、小原は腹立たしさを覚えていた。小原の通っている八王子の大学キャンパスでも、やたらと他府県のナンバープレートを付けた車が目立つ。元々は医科大学で、つい数年前から社会学部と経営学部を新設した学校だから、自動車通学の学生は昔から多かったし、医者の息子たちは、堅気のサラリーマンが見たら腹を立てるような高級外車で学校に乗り付けてくる。そういった車に東京以外のナンバーが増えた。今日も新潟県のナンバーである〝長岡〟というプレートのついたフェラーリに乗っている一年生を見かけたばかりだ。

「あのフェラーリ、雪でスリップして事故っちまえばいいのに」

物騒なことを呟きながら、駐車場の入り口のプレハブに車の鍵を預け、ツイードジャケットの衿を立てて雪が首筋にかかるのを避けながら、小原陽は表通りへと歩を運んだ。

大通りを左に折れ、飯倉片町の交差点を目指す。信号手前左手の、以前は大きな中華料理店だったところが、どういう訳か新規開店のパチンコ屋になっている。これも最近の傾向だが、六本木にパチンコ屋が次々に開店している。小原には、これも納得がいかない。なんだか東京の街が、どんどん誰かに侵略されていっているような気がするのだ。その街の従来のあり方とは違う方向に発展していっている。そして、その街にやって来る人間の大半が、それを良しとしているのも気に食わない。良しとしている証拠に、パチンコ屋は大盛況だった。

交差点の信号待ちをしながら、ポルシェのショールームに目をやると、紫色のメタリック塗装の928が照明を浴びて毒々しく輝いていた。

紫色の光り輝くポルシェ。あぶく銭をつかんだアダルトビデオ女優あたりなら大喜びで買う

かもしれない。
横断歩道を渡って、ガソリンスタンドの前を抜けるところで、危うく雪に滑って転びそうになった。かろうじて体のバランスを保つことに成功したけれど、両手を宙に浮かせてバタバタさせたのは、傍から見たら相当に無様な恰好だったろうと思うと、また腹が立った。その怒りが自分自身に対してのものであることは、小原はとうに気付いていた。
黒っぽいビルの入り口をくぐり、エレベーターで六階まで上がる。
長いカウンターだけのそのバーに、阿南康介は先に到着していた。早い時間なので、外に客の姿は無い。
「よう！」と阿南がカウンター奥の鏡ごしに言って、手にしていた背の高いグラスを上げてみせた。挨拶なのか、小原陽の名前を呼んだのかハッキリしない。たぶん両方を兼ねたのだろう。高校時代から、阿南は小原にはいつもそういう呼びかけ方をした。
「待たせちまったかな」
「そうでもない、俺が来たときにはもう雪は降りはじめてた」
「けっこう積もりそうだぜ、角のとこで危うく滑って転ぶとこだった」
「で、滑ったのか？」と阿南が聞き返した。
「だから、危うくって言っただろ。年寄りじゃあるまいし、まだ雪で転ぶほどバランス感覚が鈍っちゃいないって」
「そっちじゃなくて、肝心の方だよ。それで呼び出したんだろう？　滑ったのかセーフか、ど

っちだったんだよ」
「アウト。学部長、取り付く島無し。また留年。持ってったヘネシーのXO、単なる取られ損。これで小原陽クンの将来は絶望的ってわけだ。おい、それ何飲んでんだ？」
「ジン・ペリエ。ジンはタンカレー。それより……」
「僕にも同じもの頂戴」と、小原はカウンターの中を歩み寄ってきたバーテンダーに告げた。
「それで、どうするんだよ」
「どうするって何が？」
「この先だよ。せっかく浪人して医学部入って、教養課程で留年続けて、やっとこ専門課程に上がってもまだ必修落としてて留年で、さて、小原陽クン、この先どうするって聞いてんだよ」
「よせよ、そういう言い方。ブルーだった気持がブルーグレー通りこしてドブ鼠色になってきた」
「親父さんには話したのか？」
「話せる訳ないだろ、何て言って切り出せばいいんだよ？　お父さん、せっかくお金を積んで医科大学に入学させてもらいましたが、四年目にしてまた留年です。これでは将来、国家試験に受かるとは思えません。どうか、いま開業中の病院はお父さん一代かぎりのものになると覚悟して下さい。そんなこと言えるかよ、おい」
「いいんじゃないの、その通りに言えば」

「康介、お前は医者の息子じゃないから、そう簡単に考えられるんだよ。開業医の一人息子にかかるプレッシャーってのは凄いものなんだぞ」
「そのわりにゃ六本木で遊びまくってたよなぁ、一年生のときから」と阿南が言った。その口調は淡々としたもので、別に嫌味ではないようだった。
「だからさ、プレッシャーをはね除けるためには、そのぐらいの発散が必要だったの」
「発散しすぎてこの結果か」
「おい！」
「怒るなよな、当たってるからってさ」
「そうなんだよな、当たってるんだよ。実はさ、大学に入って二年目に、俺、気が付いたんだよ」
「何に？」
「俺、自分で思ってたよりも、バカだったんだ」
そう言って小原陽は手にしたグラスの酒を大きくあおった。
「医者になんかならない方がいいと思ったんだ、こんなバカじゃね。患者がいい迷惑だからさ。だけど、そうは思ってても、親父にそんなこと言えないしさ、お袋にはもっと言えないしさ、結局ズルズルとここまで来ちまった」
小原の素直すぎる言葉に、今度は阿南がグラスをあおる番だった。
「だけど、陽の大学は医学部だけじゃないんだろ」

「今日、学部長に言われたのもそれさ。医者になれる見込みが無いんだったら、考え方を変えて、社会学部か経営学部の三年に転入したらどうだって。うちの大学、国家試験合格率が日本全国でビリから二番目だからさ、そういう奴もけっこういるらしいんだよな」
「そういう落ち穂拾いするために、別学部を新設したって噂を聞いたな」
「それもあるしさ、あと、経営学部出れば開業医の子供でも最悪、その病院の事務長は務まるだろ」
「で、そうするって言ったのかよ、学部長に？」
阿南がバーテンダーに向かって指二本上げて、同じ酒を注文した。
「あっちにしてみりゃバカは一人でも切り捨てて、国家試験合格率を上げたいからさ、そう勧めるけど、こっちはそう簡単にハイとは言えないよ。今までに医学部に払ってきた授業料だって相当なもんだし」
「分かってるんじゃないか」
「土壇場まで来て分かったの。だから返事は保留させてもらった。規則上はまだ医学部に籍をおいてられるんだから」
「やっぱり親と話し合った方がいいみたいに思うけどな」
運ばれてきたジン・ペリエを口に運びながら、阿南が年寄りじみた言い方をした。
「ま、もう少し考えてから」と答えて小原は額に当てていた手をグラスに伸ばした。短い沈黙の後で、今度は阿南が額に手を当てて、低い声でこう言った。

「実はな、俺の方もちょっと悩んでてさ。会社、辞めようかと思うんだ」
小原は喉に流し込んだばかりの透明な液体が鼻の穴の方に入り込むのを感じて、噎せかえった。
「何だって？」
「会社、辞めようと思うって言ったんだよ」
「どうして？　広告代理店が志望だったんだろ、それに伝報堂は業界一の大手だし、配属先も連絡局で、いいスポンサーの仕事させてもらってるって言ってたじゃないかよ」
「それがさ」と、グレーフラノのスーツの胸ポケットから出した禁煙パイポをくわえながら阿南は耳の後ろを掻いた。「一年近くやってみてさ、どうも代理店って、俺なんかの考えてたのとは違う仕事だって分かったみたいなんだよな。そりゃ給料はいいよ。だけど仕事の方はっていうと、CFなんか、自分のところで製作してるのはほとんどなくて、たいていが下請けプロに高飛車発注だろ。現場行ってもあんまりやること無いしさ、結局、意味なく会議ばっかりやってるしさ、つまり中間搾取しかしてないんだよ、俺なんかの仕事って」
「そんなこと最初っから判ってたんじゃないのかよ」と、小原が言い返した。「広告代理店てのは、そういう職種だろ。クライアントとメディアの間に入ってナンボの商売じゃないかよ。承知で入社したとばかり思ってたけどなぁ」
「判ってたけどさ、いざ現場に入ると、やっぱり何だかなぁ。それに俺、付き合いで酒飲むの嫌いだしさ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.